

鬼城俳句—世界へのはじめの一步

MURAKAMI Kijō's Haiku as world literature

松井 貴子

MATSUI Takako

Abstract: MURAKAMI Kijō (1865 - 1938) is a famous modern Japanese haiku poet who distinguishes himself in his gentle compassion for the weak, not only for needy, invalid and handicapped people but also for injured animals which derived from his deafness. The purpose of this paper is to put on a record and consider how foreign students read haiku in Japanese through the special lecture on Kijō's haiku to the Czech and Slovak students who majored in Japanese language and Japanology at Palacký university in Olomouc, Czech Republic. They deeply understood the essence of Japanese haiku, and moreover, some of them composed their haiku inspired by the Kijō's works. We consequently embodied that Kijō's haiku are worth worldwide literature.

Key words: MURAKAMI Kijō, Czech and Slovak students, Palacký university

村上鬼城、チェコ人、スロヴァキア人、大学生、パラツキー大学

1. はじめに

村上鬼城は、明治から戦前の昭和を生きた近代俳人である。社会的弱者や病者、傷ついた動物への憐憫と共感、そこから形成された人生観を、多くの名句に詠んでいる。鬼城の句には、鬼城自身の境遇が反映している。鬼城は、耳が不自由であった。そのため、陸軍士官学校に行くことができず、司法官にもなることができなかった。願い通りの職に就くことは叶わず、高崎の裁判所で代書人（行政書士、司法書士の前身）となったが、生活は困窮しがちであった。

このような鬼城の俳句が、どのように外国人に理解されるのか、あるいは、理解されないのか、パラツキー大学（チェコ共和国オロモウツ市）¹で、日本語を学ぶ学生に、日本語での講義

¹ パラツキー大学は、宇都宮大学の協定校である。

本稿は、宇都宮大学重点推進研究経費による「国際学」としての「多文化公共圏研究」の一環として、日本文学（日本の近代俳句）についての講義を実施したこと（平成 21 年 3 月 9 日—13 日）に基づいている。同大学で行った俳句関連の講義の全体については、以下の拙稿 4 編にまとめている。

を試みた。

2. 教材とした鬼城句

教材として使用したのは、以下の鬼城句である。

講義日程が3月であったので、春の句を主とし、続く季節の夏の句も加えた。また、鬼城の句に対比するものとして、富安風生の句を加えている。

【春の句】

世を恋うて人を恐るゝ余寒かな
 残雪やごうごうと吹く松の風
 生きかはり死にかはりして打つ田かな
 千年の昔のごとく耕せり 風生
 治饗酒の酔ふほどもなくさめにけり
 春寒やぶつかり歩く盲犬
 闘鶏の眼つむれて飼はれけり
 市に住みて雀の親の小さゝよ
 己が影を慕うて這へる地蟲かな
 川底に蝌蚪の大国ありにけり
 こともなげに浮いて大なる蛙かな
 てふてふ²の翅引裂けて飛びにけり
 梅咲くや大崩れして裏の山
 ゆさゆさ³と大枝ゆるゝ桜かな

「チェコ人大学生の俳句体験」(「宇都宮大学国際学部研究論集」第21号 平成18年3月 宇都宮大学国際学部 17-28頁)

「チェコ人大学生の俳句受容」(「宇都宮大学重点推進研究報告(公募型) 平成19年度・20年度中間報告 研究課題名「国際学」としての「多文化公共圏」研究―特別教育プログラムの開設と学生・市民の参加による国際シンポジウムの開催」平成21年3月 52-57頁)

「多文化環境での俳句理解」(「宇都宮大学重点推進研究報告書平成19年度・20年度・平成21年度「国際学」としての「多文化公共圏」研究―特別教育プログラムの開設と学生・市民の参加による国際シンポジウムの開催」平成22年3月 147-172頁)

「俳人としてのチェコ人大学生―チェコ共和国パラツキー大学での俳句講義と句会」(「宇都宮大学国際学部研究論集」第30号 平成22年9月 宇都宮大学国際学部 1-13頁)

² 原句は踊り字(くの字点)

³ 原句は踊り字(くの字点)

【夏の句】

念力のゆるめば死ぬる大暑かな
 しは腹のごろごろ⁴と鳴る裸かな
 夏草に這ひ上りたる捨蚕かな

3. 学生たちの鬼城句鑑賞—全体を通して

受講したのは 14 名のチェコ人とスロヴァキア人の学部生であった。大学で日本語を学んで 3～4 年めの上級生で優秀な学生が選ばれていた。日本への留学経験はない。

教材とした鬼城の句全体に対する感想は、次のようなものであった。⁵

以下の稿においては、☆印を付したものが、学生たちが俳句作品を読んだ記録である。その後に、本稿での考察を付した。

☆鬼城の句は意味が深い。同世代の学生が作った句より難しい。

特に寂しい感じの句が多く、作品を通して、鬼城の苦しい人生が少し分かった。

生きていくための力も感じた。鬼城句を読んで、自分の人生は、困っているときでも、全然大変ではないと思い、人生をもっと楽しんで過ごしたくなった。

(パヴラ・ハラホヴィノヴァー)

☆俳人の作品から一番面白い句を選ぶのは難しい。(ヴォイテフ・トゥルマル)

☆現代語で作られた俳句より難しい。知らない文法と言葉がいっぱいあって分かりにくかったが、講義を聴いて分かるようになった。(バルバラ・ネーメト)

☆古い日本語が使われているのでわかりにくい。一句だけ選ぶのは難しい。

(ミハル・シコラ)

パヴラは、特に熱心で優秀な学生であった。翌年、宇都宮大学に交換留学で来日したが、東日本大震災のため途中で帰国することになった。教材とした句の全体を読み通し、鑑賞できる日本語力と思考力を備えている。ヴォイテフは、姓のトゥルマルを、「とおるまる」と読み替えて、日本語の音に近づけて、通丸という漢字名を自分につけていた。バルバラは、同級生たちから「バルバラ様」と呼ばれており、独特の存在感を放っていた。ミハルも、ヴォイテフと同じく、山柄美晴（やまがらみはる）という日本名を自分に名づけており、講義中にも使っていた。自分の名前によく似た音の漢字を探し、好きな漢字を選んで日本名を作るとは、彼らの楽しみでもあるらしい。

⁴ 原句は踊り字（くの字点）

⁵ 学生たちが書いた内容を改変しないで意味が通る日本語になるように、必要最小限の変更を加えている。

学生たちには、俳句は詩形が短かいため、作品が表面的に伝えている情報量が少ないので、読者が自分で情報を補って作品世界を完成させる必要があること、ゆえに、俳句には、解釈の多様性があることを説明した。そして、俳句の「解釈」や「鑑賞」をする、と、構えて読むのではなく、自分は、どの句が好きか、どの句がよくわからないか、というように、頭で考えるだけでなく、心で感じて、俳句を読むことをしよう、と、強調して、読み始めた。

4. 学生による鬼城句鑑賞と自句創作―春の句

春の句のそれぞれについて、学生たちは、次のように述べている。

世を恋うて人を恐るゝ余寒かな 鬼城

☆夜寒くて真っ白い人の顔が見えて、とても怖いイメージである。

(山柄美晴 ミハル・シコラ)

チェコの気候では、余寒という季節感覚を得ることは難しいだろうと思われた。日本での季節感覚でとらえると、チェコでは、2月には、深さのある積雪があり、冬である。3月になって、どの週になるかは年によるが、ある週に急速に気温が上がり、日ざしが強くなって、積雪が解けて消失する。真冬からいきなり春になり、「春暑し」という季語を使いたくなる感じであった。

鬼城の人生は、身体条件により、職業選択を制限され、生活苦から逃れられないものであった。鬼城が、この句にこめた思いは、健常な身体を持って大学で学び、これから世に出る青年には、まだわからないものであるのかもしれない。

残雪やごうごうと吹く松の風 鬼城

☆残雪のイメージとごうごうと吹く風の強さに心を惹かれた

最後の雪がとけて春になるのを待ちかねている作者の気持ちに共感した。

春の風一人で話す変な音 エヴァ・マルコヴァー

葉の上に静かに眠る春の蟬 エヴァ・マルコヴァー

☆チェコでも松は生命力が強いものとされているので面白く感じた。松が好き。

変ってる春の天気が頭痛出た パヴラ・ハラホヴィノヴァー

☆大変な時であっても希望を感じるから一番好きな句。少し悲しい感じもある。

雪があって、緑のものが松しかなくて、何か悲しくて寂しい気持ちがする。

雨の夜桜の下に一つ影 カテジナ・プデルコヴァー

「残雪の」の句を鑑賞したエヴァ、パヴラ、カテジナは、三人とも、鬼城作品に刺激を受けて、自分の俳句を作っている。鬼城句に詠まれている「残雪」「風が荒れる様子」「松」が、い

ずれも、チェコで経験できるものであったことが、実感を持って、俳句を鑑賞できた大きな理由である。中欧の内陸部にあるチェコでは、冬の厳しさ、雪の存在感、荒れる風雪の脅威が、寒冷地や豪雪地帯以外の日本で感じる以上のものであるかもしれない。春になっても雪が解けないでいて、冬の嵐そのままの強い風が、脅威を感じさせる音をたてて吹き荒れている。この厳しい状況のなかでも、松の木は常緑を保ち、風を受けながら、立ち続けている。その生命力の強さに共感しているのである。そして、春を待つ気持ちと春の訪れによって起こる変化を、それぞれの句に詠んでいる。

生きかはり死にかはりして打つ田かな 鬼城

☆俳句は季節の変化を表わす。春から稲を育てて実り、後に空虚が残る。

悲しい、哀れな気持ちがする。

花疲れ人が出て行く花見の終り ヤナ・ロゼフナロヴァー

☆生死の輪廻が「田を打つ」という普通の言葉で表わされている。

人は好むと好まざるとにかかわらず、死を免れ得ない。

春の蚊や足が赤らむびりびりよ ペテル・サボ

輪廻転生は、仏教やヒンドゥー教などに見られる東洋思想であるが、ヨーロッパには、キリストの死と復活があり、西洋近代には、リインカーネーション *reincarnation* の思想（転生によって人類が進歩、進化する）が形成された。チェコでは水田は一般的ではないと思われるが、麦畑はある。日本と同じく、毎年、変わらない農作業が継続されていることであろう。ヤナとペテルは、鬼城が、この句に込めた人生観、生命観を読み取っている。そして、ヤナは、一年の季節の変化を、人の一生に重ねてとらえ、命の終わりに目を向けている。ペテルは、いつか来る死の宿命を受け容れながらも、今は、春に相当する人生の前半期、死は遠いであろう期間を生きている自分が、蚊に刺されて得た感覚を、自分が生きている証としてとらえて、句に詠んでいる。

千年の昔のごとく耕せり 風生

☆変化が好きな自分は少しつまらないと思った。しかし、町を歩いていて、子供の頃と同じ町ではないことに気づいた。（なくなった店、新しい店、修復された歴史的建造物）不思議な感じがした。変化がないときにも色々面白いことを見つけることができるかもしれない。

湖で鴨が可愛くてかもしれん パヴラ・ハラホヴィノヴァー

☆作者は、生活の流れ、人生のサイクルについて思いを巡らしている。

毎年人は、同じことをして、同じように種を蒔き、同じ祭りをして、同じように新しい生活を始める。春には、新しい植物が植えられ、新しい動物が生まれる。

新しい一年が始まることは嬉しい。新しいものが始まると他のものは終わることは、少し悲しくもある。(アレナ・ヴルチコヴァー)

鬼城の「生きかはり」の句と比べると、風生の句は穏やかな表現である。パヴラも、アレナも、静かな作品世界のなかに、時の流れを感じている。日常の生活時間が平穏に過ぎていく間にも、古いものが新しくなる変化が起こっていることに気づいて、人生の時間のとらえ方を新たにしているように見える。パヴラの「湖の」の句は、「鴨」と「かもしれん」と、同音語の多い日本語の特徴を活かして、表現で遊んでいる。アレナは、剣道の達人で、着物に草履を履いて歩く姿には、全く違和感がなく、自然で美しく、和の身のこなしを、一般的な日本人以上に会得していた。

春寒やぶつかり歩く盲犬 鬼城

☆鬼城の俳句世界をきちんと理解するためには、鬼城が重度の聴覚障害者であったことを知る必要がある。

苦しい生活を送っていた鬼城は、虐げられた弱者の苦難をよくわかっていた。寒い春の日にぶつかり歩いている盲犬を同情し、憐れんだ。

この鬼城句は、盲犬の悲惨さに止まらず、人間と動物すべての悲哀の境涯を深く考えさせる句である。

春無言花の間に物語 ハリナ・ザビショヴァー

ハリナは、俳句作品を正確に理解したいと思い、そのためには、作者の境遇について知ることが有効であると考えた。鬼城の生涯を知った上で、この句を読んで、思索を進めている。鬼城が盲犬に向けた眼差と思いを想像し、鬼城と盲犬との関わりから、弱者という存在に意識を向け、人間だけでなく動物にも目を向けている。そして、「春寒」という季語の存在感、この句で使われていることの必然性を感知し、自作句に引き継いでいる。

川底に蝌蚪の大国ありにけり 鬼城

☆鬼城の俳句は暗くて辛いものが多いが、この句はそうではない。

春に生まれた小さな動物に集中している。

生まれたばかりの蝌蚪は生の循環を象徴し、死の繰り返しを想起させない。

蝌蚪の小ささと蝌蚪の集団の大きさを対比している。

蝌蚪の集団に生きる力が表現されている。句の表現のシンプルさと強さに感動した。

春風や壊した枝を集めるよ ヤナ・ベリツォヴァー

☆上五と中七から読者は「川の中に自分の国を樹立したかのようにたくさんのお玉杓子がいる」という情報を得る。

なぜ作者は下五で「ありにけり」と言っているのだろうか？（「ある」という動詞は省略できる）

王国の存在を強調して、読者に自分の感動を伝えたかったのであろう。

空部屋に携帯の音外蛙 ヴォイタ・通丸 トウルマル⁶

ヤナは、表現が簡潔であるがゆえに強く読者に訴えかけてくるという俳句表現の特質を実感している。鬼城が小さな存在に焦点を合わせ、大きなものと対比していることに注目し、俳句の創作法、表現と鑑賞のポイントを的確に把握している。ヴォイタは、俳句では、できる限りの省略表現をする、ということを前提として、作者が敢えて、無駄にも見える表現をしているのか、その意味を考えている。

こともなげに浮いて大なる蛙かな 鬼城

☆この蛙は生命のないもののように思う。

鬼城の生活は難聴のために苦しかったから、何もしないで幸せでいる人のように見える蛙の様子を羨んでいた。

公園で見ていた鴨が飛び出した ヴェロニカ・グラスソヴァー

ヴェロニカは、鬼城が句に詠んだ蛙を、具体的な存在ではなく、鬼城の思いを反映した象徴的な存在と見ている。何に鬱屈することもなく、自分が自分らしく、いられる場で、のびのびとしている蛙の様子が目に浮かんでいる。ヴェロニカの「公園で」の句は、鬼城の蛙のように、鴨が大きな動きを見せている。

てふてふの翅引裂けて飛びにけり 鬼城

☆この句の蝶は絶対に強いから、この句が好き。悩みがあっても、何もできないと見られても、生き続けることが必要なのである。力を出して自分の生活を変えて、強くなることができる。（カトカ）⁷

☆完璧ではない弱い体になっても頑張って生きるために何でもしている蝶と、同じように難聴と戦っている鬼城自身を表わした句だと思う。

人も、生きるために、できないこともあきらめないで一生懸命できるだけする方がいい。

冷血な春の霰で破（れ）た花 ヴェロニカ・グラスソヴァー

☆引き裂けた蝶のイメージが好きになった。

⁶ ヴォイタは、ヴォイテフの短縮形（略称、愛称）。

⁷ カトカは、カテジナの短縮形（略称、愛称）。

蝶はとても春らしくてきれいだが、この句の蝶のイメージは悲しいと思った。

しかし、この蝶は諦めないで生き続けるために結局飛んだ。

初めは悲しい句だと思ったが、もう一回読んで、悲しい句ではないと気づいた。

自分にとって悪いことがたくさんあっても頑張っていかなければいけないという意味を読み取った。

苦しいことがあった鬼城の人生にこの句を重ねて考えた。

この小さな蝶は人の励みになった。

涼風がみどりの草に雀の子 バルバラ・ネーメト

町散歩春のあられにたたかれた バルバラ・ネーメト

カトカ、ヴェロニカ、バルバラは、いずれも女子学生である。蝶を、歴史的仮名づかいで「てふてふ」と表記していることや、蝶が美しい昆虫であることよりも、羽が傷ついてなお飛び続けようとする姿に意識を向けている。そこに強さを感じ、自分自身への力づけともなり得る意味を見出している。「引き裂けた蝶のイメージが好きになった。」というバルバラの感覚にはバルバラらしさが表れている。ヴェロニカの「冷血な」の句、バルバラの「町散歩」の句は、鬼城句に詠まれた蝶に重なる。

梅咲くや大崩れして裏の山 鬼城

☆梅の花が咲いているのは春の美しいもの。裏の山が崩れたのは美しくない。

鬼城は二つのイメージを対比して悲しい気持ちを表わしている。

この句を読むと哀しい感じがする。

散歩をしばしよびしよになる春雨に マルティナ・パブリコヴァー

春の海うねりが強い妖気音 マルティナ・パブリコヴァー

梅の落花誇りを無くす泥の中 ヤン・ゾウファリー

マルティナは、この鬼城句に対比という表現技法を見出している。そして、鬼城句に倣って、自作句でも、対比によって、想定外の事態に対する思いを表現している。ヤンは、鬼城句をうけて、自句を創作している。ヤンの創作法は、鬼城句が作った作品世界を展開し、連句のように、作品世界をつなげていっている。

5. 学生による鬼城句鑑賞と自句創作―夏の句

鬼城の夏の句を選んだのは、ミハルのみであった。そして、選ばれたのは「夏草の」だけである。

夏草に這ひ上りたる捨蚕かな 鬼城

☆「余寒」の句よりもっと気になった。中国の作家、矛盾の「春蚕」という小説に、三十年代に絹を作っていた人の苦勞が描かれていたことを思い出した。

飛びたくて空に入らずコケコッコウ 山柄美晴 ミハル・シコラ

黒い雲南から来た鳥帰る 山柄美晴 ミハル・シコラ

ミハルは、日本語と同時に中国語も学んでいた。日本語を第一言語としている私には、日本、中国、台湾で使われている漢字が、読みや意味、字体が違っていることが強く意識されていて、区別して学ばなければならないから大変なのではないかと思われたが、非漢字圏の言語を第一言語とするミハルには、その差異は小さなものであるらしい。漢字だけを使う中国語と漢字かな交じりで複数種の文字を使う日本語との差異の方が大きいのかもいしれない。

ミハルは、句の鑑賞では、中国文学を考え合わせて、作品世界を広げ、句の創作では、漢字、ひらがな、カタカナを使って、日本語の特性を活かしている。

6. 学生たちが目を向けなかった鬼城句

学生たちは、鬼城の春の句、夏の句、それぞれに共感を感じて理解し、鬼城へのオマージュともいえる俳句創作をしていた。しかし、下記の句は、読み解こうとする学生がいなかった。★は、それぞれの句が選ばれなかった、理解されなかった理由として、講義をしたときに、私が考えたことのメモである。その後に続けて、本稿での考察を述べた。下記の句については、学生たちは、わからないから選ばなかったと言うに止まり、内実を述べるには至らなかった。自分がわからないことについて、自覚的に考えて、何がわからないのか、なぜわからないのかを、明瞭に言語化して述べるのは、日本人学生が日本語で述べるのであっても、容易ではないことがあるので、外国人学生にとっては、もっと困難を感じることであったのであろう。

【春の句】

治蠶酒の酔ふほどもなくさめにけり 鬼城

★治蠶酒の意味を大学生に理解させるのは難しい。

治蠶酒は、立春から五番目の戌の日に土地の神に供える酒のことである。この日に酒を飲むと蠶が治るという俗信がある。特定の日に酒を飲んで、病気や障害が治癒するというのは、非科学的である。自分が属する文化圏に、同じような俗信がなければ、非合理性の方が強く感じられて、理解には至りにくいと思われる。

闘鶏の眼つむれて飼はれけり 鬼城

★生きる努力をしていない様子を嫌ったか。

闘鶏は、日本でも、ヨーロッパでも、古代から行われていた。現代の日本では、身近に見られるものではなく、チェコでも、どれほど行われているか不明である。この句では、戦うために飼育された鶏が失明して戦うことができなくなり、ただ人に飼われていることが詠まれている。役に立たないまま生かされていること、受身の生であることが、学生たちの心を引かなかったのであろう。

市に住みて雀の親の小さよ 鬼城

★現状を受け入れている様子に共感しなかったか。

上五と中七、下五の内容の因果関係がつかみにくかったのではないと思われる。雀を詠んだ句としては、小林一茶の句が思い浮かぶが、わかりやすく結びつけられる感じではない。都市に住む大変さを詠んでいると解釈されるが、パラツキー大学のあるオロモウツ市は、首都プラハのような大都市ではなく、プラハ出身の学生もいなかったため、注目されなかったのであろう。

己が影を慕うて這へる地蟲かな 鬼城

★地を這う虫が弱者をイメージさせたか。

地虫は、コガネムシ科の昆虫の幼虫で、地中に住み、農作物の害虫になるものもある。日本には、「一寸の虫にも五分の魂」という諺があり、この鬼城句では、虫を擬人化して詠んでいる。チェコの大学生たちは、擬人法を否定していないが、地を這って動く虫に心の動きを認めることには同意できなかったのかもしれない。

ゆさゆさと大枝ゆるゝ桜かな 鬼城

★桜が身近にない。日本の国花に対して遠慮したか。

チェコやスロヴァキアでは、桜は身近な木ではないが、花を咲かせて、大きな枝を揺らす木は身近にある。それでも、この句を鑑賞しようとしなかったのは、この句で、「桜」が詠まれていることの意味をつかみきれなかったからではないかと思われる。桜の特徴的なイメージは、花が咲いて、すぐに散ることである。注目は花に集まる。枝が大きく揺れることは、既知の桜のイメージからすると違和感を感じさせて、理解の範囲を超えてしまったのであろう。

【夏の句】

念力のゆるめば死ぬる大暑かな 鬼城

★緯度の高い中欧の内陸国であるチェコの夏は日本の夏と違う。

高温多湿の日本の夏は、日本より緯度の低い国に生まれ育った留学生にとっても、暑さをつらく感じるようである。死の恐怖に通じるような暑さを感じることは、チェコでは、ほとんど経験しないことであろう。念力で暑さに耐える感覚も、日本の夏を実感しなければ、想像もできないかもしれない。

しは腹のごろごろと鳴る裸かな 鬼城

★女子学生には理解しづらい。

受講生は、20 代の大学生で、男子学生より女子学生の方が多かった。女子学生にとっては、異性の老人の身体感覚を想像することは、積極的にしようと思わないことであり、裸であることも、女子学生には普通ではない。男子学生であっても、自分が経験していない年齢の男性の身体感覚には共感しづらいことであろう。

7. おわりに

チェコ人とスロヴァキア人の大学生たちが、自分で選んで評釈を加えた鬼城句は、特定の句に偏っていない。それぞれに、自分の感覚に従って句を選び、理解して鑑賞している。チェコやスロヴァキアと日本とでは、社会のなかでの個人のありようが違って、それが、大学生たちの句の選び方に反映しているかもしれない。しかし、日本人であるのか、チェコ人であるのか、スロヴァキア人であるのかに関わらず、彼らは、人間としての思いを、鬼城の俳句に重ねていることが見える。鬼城が、その俳句作品に詠み込んだ心の本質をとらえた理解が示されていることは、鬼城の俳句が、異文化の障壁を越えて共有できる可能性を提示している。

参考文献

「村上鬼城集」 山下一海他注釈『日本近代文学大系第 56 巻近代俳句集』1974・5 角川書店 96－115 頁

松本旭「村上鬼城」 沢木欣一編『新訂俳句シリーズ人と作品 19 近代俳人』1973・1 初版、1980・5 新訂版 桜楓社 29－49 頁

中里麦外『村上鬼城—解釈と鑑賞—』1993・8 永田書房

田島武夫監修『村上鬼城全集』第 1 巻俳句篇 1974・5 あさを社

田島武夫監修『村上鬼城全集』第 2 巻創作・俳論篇 1974・8 あさを社

田島武夫監修『村上鬼城遺墨集』（村上鬼城全集別巻） 1974・8 あさを社

村上幹也 五日会叢書②『生涯俳諧—鬼城俳句の周辺—』1986・9 五日会

図録 第 65 回企画展「村上鬼城—その生涯と作品」2009・4 群馬県立土屋文明文学館

本論は、第 65 回企画展「村上鬼城—その生涯と作品」記念講演会「世界の鬼城俳句—はじめの一步」（平成 21 年 5 月 17 日 於群馬県立土屋文明記念文学館）を元にして、考察を加えたものである。